

現代アイヌの生活におけるイオルの意義と役割

ー北海道平取町を事例としてー

環境資源学専攻 森林・緑地管理学講座 森林政策学 河野 稜

1. はじめに

狩猟採集民族であるアイヌは自然資源の調達場をイオルと呼んだ。現在、平取町では、アイヌ文化保全の為に自然環境の整備を図る「イオル再生事業」（以下、イオル事業）が展開されている。卒論では、イオル事業が工芸に係る樹木の栽培に注力していることを明らかにした。一方、そうしたイオル事業の姿に対するアイヌの思いは把握できなかった。現代のアイヌはイオルに依存した生活を営んでいない。その中でイオルを再生するならば、アイヌの現代的な自然との関わり方を把握・考慮する必要がある。

本研究では以下を目的に設定した。まず、現代に生きるアイヌの自然との関わりを把握し、生活の中で自然環境が果たしている役割について明らかにする。加えて、イオル事業に対するアイヌの評価を明らかにする。以上を踏まえ、現代におけるイオルの存在意義を探るとともに、イオル事業の今後の在り方について検討を試みた。

2. 方法

平取町には、豊かな自然環境を背景に育まれたアイヌ文化が色濃く残されている。生業や文化活動を通じてアイヌ文化に関わりを持つ町民（以下、文化伝承者）が多数居住している。文化伝承者の自然との関わりを把握することにより、イオルの現代的意義・役割が明らかになると考えた。本研究では14名の文化伝承者に聞き取りを行った。

3. 結果と考察

文化伝承者の生活の中で、自然環境は①動植物資源の調達場、②カムイ（神様）の存在を意識する精神的支柱、③アイヌとしての自己を確立する場という役割を果たしていた。①②はイオルの本来の意味・機能と合致していた。①②を通じた伝統的生活の追体験が、民族的アイデンティティの形成に寄与していた。また文化伝承者は、イオル事業がアイヌ文化と繋がり深い自然環境に着目している点を高く評価していた。一方、イオル事業の姿や方針に対しては否定的な評価が下されていた。主に「イオル事業と関わる機会が無く、地域に馴染んでいない」、「整備されている自然環境が『イオル』と言えるか疑問である」という意見が多く聞かれた。前者に関しては、町民が参加可能なイオル事業の取り組みは山菜採り等のイベントに限られることが影響していた。後者に関しては、「工芸材料だけでなく、あらゆる自然資源が手に入る空間が『イオル』である」と文化伝承者が捉えていることが影響していた。この2つの評価から、文化伝承者の多くは「イオル事業はアイヌ（文化）のためになっていない」と感じていた。

現代におけるイオルの存在意義は、アイヌがアイヌ民族らしさを学び伝えていくことを可能にするという点にある。また、町民とイオル事業の関わり方について見直し求められていることが調査結果から示唆された。多くの町民が自然環境の整備・管理といった、イオル事業の本質的な部分に関与できる体制を整える必要がある。そうした取り組みを通じて、地域全体でイオル像を再構築していくことが望まれる。